

子どもしんぶん

さん太タイムズ

毎週日曜
発行!2016年(平成28年)
1月3日(日)発行所 山陽新聞社
〒700-8534 岡山市北区柳町 2-1-1

きょうの紙面

- ①②③ 夢の軽スポーツカー
- ④⑤ プーさんのふるさと
- ⑦ クマ先生とよむ論語
- ⑧ ニコプチNEWS
- ⑩⑪ 漫画日本の伝記
- ⑭ まなびバ 美川小
- ⑯ 英語を楽しむ絵本

子どもが振り返る車を

けい 軽スポーツカー かい はつ せき にん しゃ 27歳 さい むく もと 椋本さん(井原出身)



新型スポーツカーのS660と開発責任者を務めた椋本さん＝栃木県芳賀町、本田技術研究所

躍動感ある車体に、鋭いつり目のヘッドライト。2015年4月、大手自動車メーカーのホンダ(東京)が発売し、日本全国で話題になった車があります。「S660」と名付けられた軽自動車の新型スポーツカー。斬新なデザインは、遠くからでも目立ちます。

開発責任者を務めたのは、本田技術研究所(栃木県芳賀町)の社員椋本さん(27)＝井原市出身＝です。通常は40～50代のベテランが務めるポストですが、11年に22歳で抜擢されました。同社としては史上最年少だそうです。

きっかけは、自ら企画した「軽自動車のスポーツカー」が社内コンテストでグランプリを受賞したこと。その後、商品化が決まり、

大役を任されることになりました。

「運転して楽しい車、子どもたちに振り返ってもらえるような車を作りたい」と語る椋本さん。若手を中心に開発チームを立ち上げ、約4年かけ発売にこぎ着けました。注文しても納車が約1年先になるなど、人気車種となっています。

「いつか自分の思い描くスポーツカーを作りたい」。入社してから持ち続けた夢を見事に実現させた椋本さん。休む間もなく、すでに新たな仕事に着手し、人々の記憶に残る車作りに情熱を注いでいます。(井上光悦、写真は中村映一郎)

＝2、3面に続く

HONDA S660 とは？

「^{うんてん}運転^{たの}して^{くるま}いて^{みち}楽しい^ゆ車^{ひと}に^{ひと}」「^{くるま}道^{おち}行^ふく^{かえ}人^{かい}が『あ
の車、かっこいい』と思^{むくも}わず振^{かえ}り返^{かい}つて^{かい}もら^{かい}える
デザイン^{かい}に^{かい}したい^{かい}い^{かい}」。棕^{かい}本^{かい}さん^{かい}を^{かい}は^{かい}じ^{かい}め^{かい}と^{かい}する^{かい}開^{かい}

はつ おも こ ひ びくるまづく
 発チームは、そんな思いを込めながら日々車作
 りに励んだそうです。随所にちりばめられたこ
 ろも ちと しいし
 だわりを松本さんに徹底解説してもらいました。



てかる
手軽にオープン

簡単に屋根を取り外せるようにしました。外した屋根は巻いてフロントフード内に収納できます。気持ちの向くまま、手軽にオープンカーが楽しめます。晴れた日に走らせると最高に気持ちいいですよ。



パワーリヤウインドウ

でん どう かいへい しゃ ない はい
電動で開閉でき、車内に入
こ かせ りゅう ほうこう ちようせい
り込む風の量と方向を調整
ひと たの
します。もう一つの楽しみ
かた おん まど あ
方がエンジン音。窓を開け
あたま うし おと
ると頭の後ろから音がダ
き
イレクトに聞こえてきま
くる票 がい わ
す。まるで車と会話し
ていうようで、ワクワク
しゅんかん
クする瞬間ですね



仕上げは
“人の手”

細かい部分までしっかりと作るからこそ、スポーツカーの走りが生み出されるといっても過言ではありません。生産台数は1日約40台、月800台と限られますが、工程の一部にはロボットだけでなく、熟練職人による作業も組み合わせました。

ミッドシップ
エンジン

一般的にフロントに置かれることが
多いエンジンですが、S660は車体
の中央に置く「ミッドシップ」を採用
しました。路面に吸い付くような走
りを実現させる低重心設計と併せ、
軽快さが期待できます

スペック
全長 3395^{ミリ} 全幅 1475^{ミリ}
全高 1180^{ミリ}
車両重量 830~850^{キログラム} 定員 2人
価格 198~218万円



カラー

スポーツカーは見ただけで元気が出なく
 ちゃ。そのためにはボディカラーの設定も
 重要で、6色用意しました。白や黒といった
 落ち着いた色はもちろんですが、明る
 い色も議論を重ねて決めていきました。僕
 の薦めはカーニバルイエロー。名前からしてウ
 キウキするでしょ？

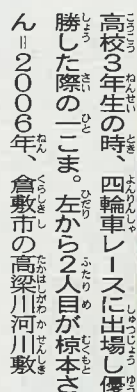


コックピット

自動車レース最高峰のF1マシーンをイメージ
しました。ドライバーを包み込むようにデザイ
ンされたインテリアは人と車を一体に。運転
の楽しさを最大限に生かした作りです



三二四駆好き／本田宗一郎氏の伝記に夢中／仲間と作った四輪車で優勝



入社して最初に配属された部署で使用していたノミやカンナ。自作の箱に大切にしまっている

井原市出身の椋本さんは、地元の
小中学校を卒業後、笠岡工高（笠岡
市横島）を経て、2007年に本田
技術研究所に入社しました。

根っからの車好きで、幼いころか
らミニ四駆を近所で走らせたり、プ
ラモデルを作ったりして遊んでいた
そうです。

人生を変えるきっかけは小学3年
生の時。ホンダ創業者の故本田宗一
郎氏の伝記を図書室で見つけたので
す。「読んで夢中になりました。バ
ッ

イクを作り、F1に参戦するために
車まで作る。常に夢に向かって挑戦
していく姿がかっこよかった」

卒業後は地元企業に就職するつも
りでしたが、本田技術研究所からの
求人を知り、試験を受け合格。試
車の原寸大の模型を作る仕事を担
当しました。ノミやカンナを使って、
未来の車のデザインを作っていたそ
うです。

岡山での思い出は数え切れないほ
ど。楽しい出来事だけではありませ

むくも
椋本さんってどんな人？
ひと

ん。中学2、3年生の時には新聞配達はたらきのアルバイトをやり遂げ、毎日地道みちのちに取り組む姿勢せいしを学びました。高校3年生の時、50ccのバイク用エンジンエンジンを搭載とうざいした四輪車よりんしゃのレースに出場しゅつじやうし、見事優勝みごとゆうしょう。チーム一丸いちぐわとなって頑張ることの重要性じゆうじゆうせいを肌で感じましたと言います。いずれも新車開発しんしゃかいぱつの仕事しごとにつながる経験けいけんです。

岡山おかやまの小中学生しょうちゅうがくせいに対しては「勉強べんきやうだけでなく、遊びも全力ぜんりきでやり遂げる。それが大人おとなになっても生きてきます」と力を込め、「感受性豊かんじせいちゆうかな時ときこそいろんなことに挑戦ちせんしよう」とエールを送ってくれました。

えすろくろくまる かい はつ せき にん しゃ むく もと き
S660開発責任者 椋本さんに聞く

S660の開発責任者として陣頭指揮を執った本田技術研究所の椋本陵さん。途中、東日本大震災が起こるなど危機もありましたが、各部門のエンジニアと協力し完成させました。昨年12月に研究所を訪ね、取り組んだ仕事ややりがい聞きしました。

—開発は椋本さんの応募作がきっかけになったのですね。

研究所創立50周年を記念した新商品提案企画で、約800件の中からグランプリに選ばれました。受賞後に作った試作車に社長が乗り「これを作ろう」と言ってくれたんです。

—開発責任者に選ばれた時の気持ちは。

「マジか!」と思いました。不安はありましたが、ベテランが補佐してくれることになりましたし、何より「自分が作りたいスポーツカーを開発する」という夢を強く持っていたので、やるしかないという覚悟を決めました。

ぜん いん ねつ い
全員の熱意
この一台に

若手中心で構成した開発チーム。立場や年齢に関係なく、意見を出し合いながら一つずつ課題を解決していった



—開発はどのように行われるのですか。

まず、どんな車を作るかを詳細に決めます。そして車を作るために必要なエンジンやボディー、変速機など各部門が協力しながら進めていきます。通常は開発責任者が「こうしよう」と決めていくのですが、メンバーは30代の若手を中心。年齢や立場に関係なく、話し合いで決めていきました。僕は意見を聞き方向性をまとめる役です。ちなみにインテリア部門のリーダーは岡山市出身の森下勇毅さん(29)。もちろん会話は岡山弁でしたよ。

—プロジェクトの存続危機があったと聞きます。

2011年3月に起こった東日本大震災です。チームがいた栃木県の研究所は建物の一部が壊れるなど被害を受けました。何とか続けられましたが、逆境を克服したことで一体感が生まれたと思います。

—出来上がった車を見てどうですか。

「最高のスポーツカーを作ってやろうぜ」という全員の熱意がこもった車になりました。ゼロから作り出す仕事に携われ、幸せでした。これからも若い人にも振り返ってもらえるようなカッコいい車を作り続けたいです。



えすろくろくまる かい はつ よろこ くるう かつ むく もと
S660を開発した喜びや苦勞を語る椋本さん



えすろくろくまる かい はつ
S660の試作車完成後、記念写真に収まるスタッフ(最前列中央が椋本さん)